

## 「VS. かWITHか」

四国情報通信懇談会

副会長 土居 英雄

(株)愛媛新聞社 代表取締役社長



今年には戦後70年。ICT（情報通信技術）社会と言われる今日、私たちは70年前には想像もできなかった利便性と創造性の恩恵に浴しています。一方で、アナログ対デジタルのように異なる嗜好で評価が分かれる分野があるのも事実です。

新聞の社会面には事件・事故が数多く掲載されます。解決までに時間が掛かるケースもしばしばあります。先日、「逃亡容疑者の加齢を予測」「顔立ち変化科学的に数値化」「科警研がシステム実用化」という見出しの付いた記事が掲載されていました。警察庁の科学警察研究所（科警研）が長期の逃亡容疑者や行方不明者の現在の顔立ちを予測するシステムを開発したという内容です。人相はその人の来歴を表し、性格・人格もうかがうことができると言われます。人生の経験を積み重ねることで、その象徴である顔が出来上がると思うのですが、データと科学技術で将来像が予測できるようになったのです。

また人工知能（AI）が話題になっています。人類は道具を発明し、産業革命を実現し、情報通信革命を経てAIや、家電や自動車を含めた幅広い製品や機械がネット接続されていく「モノのインターネット」（IoT）の時代を迎えています。最近、プロ棋士とコンピューター将棋ソフトが対決する「電王戦」が話題になりましたが、さまざまな分野でAIが人間を凌駕（りょうが）する現象が起こってきます。現在の自動車工場では工業用ロボットなしに製造は考えられません。科学技術の革新は人類に多くの便利さや快適さを提供し、時間や空間を超え、制限領域を変えて来ました。AIがプロ棋士に勝つように、ひょっとすると芸術の分野でもそういうことは起こり得るかもしれません。

このような状況を勝ち負け、つまりいつまでも人間が優位に立たなければならないと捉えるのではなく、私たちを取り巻く新たな環境の出現であると考えれば、先端技術に振り回されることなく対処できると考えます。「自然」の中で私たちは生かされているのだとよく言われますが、私たちが創り出した第二、第三の環境も新たな「自然」です。そこで共生（アクリート）しようと思うことで、科学の進化と人間とが調和を保ち続けていけるのだと思います。戦後70年、さて人間はどれだけ進歩したのでしょうか。